

直接間接にイギリスの植民地政策の本質の那邊にあるかを物語つてゐる。又、英國植民地政策の被害を直接被つてゐる印度人の激情が筆を取らしめた「印度の叫び」(ボース・ラスビハリ著)「印度」(エ・エム・サハイ著)の如きは、讀者の心に憤激の情を湧かせずにあかない。更にこれ等によつて書かれた「英國の世界統治策」(世界創造社刊)「英國植民地政策史」(國際經濟學會編)等の通俗書も、國民の腦裏に深い反省を喚起したのである。

三 日本人の世界史

近時思想戦の重大性が國民に注意せられ、第一次歐洲大戰當時に於ける思想戦の効果が——休戦當時ドイツ軍の殆んど大半は聯合國側の領土で戦をしてゐた。即ち戦闘に於てドイツは却つて聯合軍を制してゐた。然るに思想戦に敗れ、國內の思想は混亂状態に陥り、遂に降服を餘儀なくせられたのであつた——或は出版物を通して、或は展覽會、講習會を通して傳へられた。又近くはイギリスの諜報機關とも見做すべきロイタル通信社の東亞部長コックスの檢舉事件があり、諜報戦の如何に恐るべきかが熟知せられるに至つた。然し乍ら歐米の植民地政策の歴史と現状とを調査した筆者には、更に恐るべき思想戦が常時教育によつて遂行される學問戦争であることを強

調せざるを得ない。就中歴史教育こそが最も恐るべき思想戦であることを指摘すると共に、眞の歴史、歐米中心の歴史を否定し、その上に築かれた日本史、更に云へば日本を中心として考察し記述せられる世界史の建設の要を力説したい。

昭和十四年の秋、筆者は政府の命により支那に調査旅行を試みたが、その折上海の某外人の推賞によつて繕じた歴史書に「西歐の退却」(Retreat of the West)なる書物があつた。「西洋の没落」は有名なシュペングラの筆になる西歐文明の批判であるが、「西歐の退却」は實は東洋人、而も半島出身のわが同胞の著にかゝる。著者は朴氏(Non-Yon-Park)と云ひ、日本、朝鮮、支那、ヨーロッパ、アメリカに遊學し、東西の史書を繙讀し、在來のヨーロッパ中心の歴史の誤謬僞瞞を明らかにしたのみならず、更に進んで、東洋中心に世界史を書き改めてゐるのである。ハーバード大學の講師であり、アメリカ各地に講演し、アメリカ人の異常な關心を勝ち得、輿望により講義録を纏めて一書にしたのが、他ならぬ「西歐の退却」である。最初に、西紀三世紀の頃活躍した匈奴王アツチラの歐洲進駐を中心としての歴史を述べ、これによつてヨーロッパの封建制度成立の事情を説き、これについて成吉思汗の歐洲進出とこれに對する防衛として生れた歐洲近代國家の成立事情を明かにしてゐる。これに續いてトルコの勃興と十字軍に説き及ぼし、十字

軍戦争の續行中ヨーロッパ人の獲得したアラビアの自然科学が、やがて近世ヨーロッパ文化形成の基礎となり、これを武器としてアジア、アフリカ、アメリカ、オーストラリア侵略が始められたと叙述してゐる。惨虐と謀略をもつて織りなされた西歐諸國の植民地獲得のための數百年の戦争こそが近世史を流れる基本的事實である所以を確認した著者朴氏は、この不當なるヨーロッパ諸國の侵略に抗し、やがてこれを反撃しつつある日本の擡頭を没却する筈はない。「日本の勃興」なる章に、明治維新以來の日本を中心とする東亞の歴史を詳細に叙述し、やがて結論を提起してゐる。キリスト教主義に立つ著者の思想は、折角こゝまで展開した正しい論述を最後に至つて誤謬に導き、戦争否定論に終つてゐるが、從來日本の教育に用ひられた世界史とは全く異なる内容を持つこの史書が、イギリスの舊植民地たるアメリカ合衆國に於て非常な歓迎を受け得たことに我等は大いなる喜びと自信とを感ぜざるを得なかつたのである。「成吉思汗は何故あの様な大業をなし得たか」といふ問に對し、朴氏は東洋の女性が家事一切を自己の手に引受け、男子をして後顧の憂を抱かせず、充分の働をなさしめた事實に觸れ、アメリカの如く働き疲れて歸宅した主人に掃除をさせる権利ありと考へる個人主義的享樂主義的婦人の多いアメリカからは成吉思汗の如き偉人は絶対に出来ないと云ふ論評を下してゐる。この朴氏の議論は洵に痛快であり、わが國の現

代文化に痛棒を加へることもなるが、私がこの書を拾ひ讀んで驚き且快哉を叫んだのは、この書の出づるに先立ち、仲小路彰氏の著書「圖說世界史話」(全十卷)及び「世界興廢大戦史」(全百卷目下刊行中)に於て、ほゞ同様の日本世界史ともいふべき斬新にして驚くべき世界史を知つてゐたからである。

四 歐米人の世界史

京都帝大講師室賀信夫氏の談によれば、「人文地理學」(Antropogeographie, 2Bde 1873—4)を著した名高ラツツェルは、その後、「民族學」(Völkerkunde, 3Bde 1885—88)と「政治地理學」(Politische Geographie 1897)の兩著を著はして前書の意見を是正してゐるにも拘らず、植民地の繩張りを一應成就した西歐諸國の諸學者は、地理學の學問的立場を明確ならしめるためと稱して、其後逐次に地理研究から國家、政治、歴史、思想を除き、景觀地理學を唱へ、この墮落した地理學を輸入したわが地理學界も亦、多年景觀地理學に躊躇し、地理學に於て重要な役割をすべき國家乃至民族の問題が閑却されたことが明白となつた。西歐地理學並びにその流をくむ現代の日本地理學が植民地に於て單一栽培が行はれてゐる事實を説くのみで單一栽培が固執される理由を

何故問はないのか。ニューギニアが食人種の國であるなどと何故に久しく信ぜられて来たのか。子午線が何故にイギリスのグリニチ天文臺を基準に計らぬばならぬのか。兩極近くに多くの植民地をもつイギリスが、兩極に至るに従つて面積の廣く投影されるメルカトル投影法によつて地圖を描く祕密は何處に求められるか。等々、我國として當然問題とすべき事柄について、從來殆ど論議のなかつた理由を改めて問ひ質さねばならない。(小牧實繁著「日本地政學宣言」参照)同様のことはランケの亞流リース教授の指導した日本の歴史學界にも存すると見て然るべきものである。云ふまでもなく不平等條約下に呻吟した明治時代の我國は、速かに西歐的文化と同じ程度の文化を培はなければならなかつた。従つて現代ヨーロッパが如何にして成立したかを明かに知るために、ヨーロッパに出來上つたヨーロッパ中心の世界史を學びとる必要があつた。現代ヨーロッパは如何にして成立したか。文藝復興こそ近代史の出發點であつたに相違ない。而して文藝復興はギリシャ、ローマ文化の復興であつた。ギリシャ文化、ヘレニズム文化は、遠くその淵源をメソポタミア地方に開花した古代東方諸國に求め得る。かくてヨーロッパ人は現代文化の理解のために、又は次の世代を擔ふ人々に自ら世界を壟斷することの必然性と合理性を確信せしむるために、この様な叙述をなさなければならなかつた。古代東方諸國、ギリシア、ローマ、ゲルマンの侵入、

文藝復興、新大陸、航路の發見、近代國家の成立、かうした順序は、ヨーロッパ人の自信を次の時代を背負ふ青年に傳へるために當然とるべき歴史教育の體系であり、明治の日本にとつても或る程度學ばるべきものであつた。併し乍ら明治四十四年完全に不平等條約を擊退し得た日本にとつては、既に右の如き歴史の體系は不必要な體系となつた。否、有害な體系、誤れる體系となつた。日本の歴史的使命が歐米諸國の不當なる世界支配を覆滅し「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ、兆民ヲシテ悉クソノ堵ニ安ンゼシム」ることに存するは、朴氏の世界史を讀ますとも明らかであるからである。然るに不幸にしてヴェルサイユ體制下、戰勝國側に組した我が國のインテリ達は英、米、佛の文化に相似するを以て我國の文化の興隆を意味するものと誤認し、こゝに日本の歴史的使命とインテリの意識との間の間隙は時と共に擴大しつゝ、滿洲事變を迎へ、更に何程も根本的な反省を見ることもなく支那事變を迎へたのであつた。今や日本は支那事變を契機として英米的世界舊秩序に對する決定的なる角遂をなし、この舊秩序の崩壞に反比例して成立すべき世界新秩序の建設に向つて、好むと好まざるとを問はず、進むべき運命に遭遇して居る。日本の歴史的使命をインテリも亦明確に把握すべき時期に直面してゐるのである。このことを明瞭に正確に認識することが無知識人より識者に立歸る唯一の道なのである。

かくの如く考察する時、從來私共歴史家の説いて來た歐米主義日本史、歐米中心に出来上つた世界史の鑄型に押し込んで歪曲した我皇國史を、この鑄型から解放することが最も切實な任務であることを痛感する。歴史家が過去數十年、歐米諸國の思想戦に敗れた責任を、正しい皇國史の編纂を通して回復する義務を感じるのは獨り私のみではないと信ずる。私は及ばずながら、今日まで近世史の批判を通して歐米の植民地政策を闡明し、植民地政策の角度から日本史、支那史、印度史を考察し、從來重視せられなかつた問題を取り上げることが出来た。新しい着想が新しい史實を發見し、史的諸聯關を構成することの出来る事實は、私ごとき非力をもつてしても或程度歴史の真相を闡明し得たことによつて、何よりも雄辯に物語られるであらう。出来上つた理論を捨て、とらはれざる心をもつて事象を忠實に觀察する時、甫めてそこに眞實が發見されることは必ずしも所謂文化科學に限つたことではなく、自然科学の歴史を見れば極めて端的に示されてゐる。科學振興が日本人としての素直な感覺、感情、感受性、佛教的表現をかりれば日本人の信受力を西歐的理論より解放することに主眼を置く教育によつて、即ち今後行はれる國民學校制度の

實施を通して實現されることを私は確信してゐる。

西歐中心の歴史の誤謬は、京都帝國大學の梅原末治博士の考古學研究——「古代北方系文物の研究」「支那考古學論考」——によつて指摘せられ、スキタイ文化の一方的影響として解された周より漢に至る支那文化が、逆に、スキタイに多大の、而も優位の影響を及ぼしたことが證明されてゐる。更に二千六百年記念事業の一つである「日本文化大觀」の委員として活躍してゐる少壯有爲の史家赤松俊秀氏は、大化の改新を支那文化の影響によつて説明せる學界の定説を覆し、我上代の國書が外交官の軟弱なる態度によつて唐朝に齎らされなかつたとの説に對し、支那より日本に送る國書案の文中に天皇の下にスメラミコトに當る漢字を加へてあることより、我が國書が堂々たる宣命であり、而もそれが唐朝に齎らされたものであることを推論してゐる。又詳細なる記録と古文書の再吟味によつて、日宋關係について從來定説の如く見做された意見、即ち我國が宋文化の下風に立つたとされたことが否定され、我國より米、材木、硫黄、金等が數多南宋に輸出せられ、この生活必需品によつて、南支の經濟が我國に從屬してゐたことが論證せられ、多年誤り解せられた宋錢の問題、即ち數多日本に残存せる理由が明快に説明された。又時宗の生立と熊野權現との深い因縁を通して、鎌倉佛教に及ぼせる禪宗の絶對的影響が否定せられ、元寇に際

する彼我の勢力關係の是正までも新たなる解釋によつて置きかへられようとしてゐる。同氏の研究が、在來の西歐的歴史の鑄型にはまらない、極めて素直な心に出發し、而も日本の現在の外交を自信なきものたらしめた有力な理由の一つ、誤れる日本外交史を次第に正しき姿に戻し、たゞましい我國民、我祖先の業績を世人に知らしめてゐることは、洵に喜ばしいことである。東亞新秩序建設の指導的役割を果すは日本皇國であると爲すのが、單なるお題目でないこと云ふことが、今後捉はれざる我が少壯史家、歐米史學の理論に膝を屈せざる青年學徒の精進によつて、急速に闡明せられるであらう。「強ひて日本の歴史を美化する必要はない」などと眞の科學に目覺めぬ歐米追隨者、所謂ナチ禮讚者共はいつてゐるが、この様な日本の歴史を知らぬ人達に別段青年は何物かを期待してゐるのではないであらう。從來青年が歴史に興味を持たなかつたのは入學試験制度の罪ばかりではない。教へられる歴史内容が植民地人を作る歴史内容であつたことに最大の理由が求められる。傳統に確信を有つことと、世界の現状を明察することとが一體となる歴史、日本を中心とする世界史、これによつて青年は喜ばしい日本の將來に希望を抱き、國體の眞の尊さに目覺め、更に輝かしい日本の世界史的使命に勇躍身を投ずるであらう。

六 結 語

明治維新以來、わが國民の學問的思想的ヨーロッパ遍歴は飽くこともなく久しく續いたことである。思へば八十年に近い年月に互つてゐる。ヨーロッパ諸國の侵略を喰ひ止めるために、われらの先輩は血みどろの戦を續けて來たのである。侵略國の文化にどうすれば到達出来るのかと日夜苦慮し敢闘した先輩諸士の努力には頭を下げないでは居られない。假令その努力がヨーロッパの植民地工作を誘導する上に役立つたとしても、われらは必ずしもこの遍歴の結果、極めて少数の氣持は起らないのである。久しいヨーロッパ遍歴、幾代かに互つてこの遍歴の結果、極めて少数ではあるが、ヨーロッパ文化の本質と、ヨーロッパ諸國の國家としての意志が何であるかを明確に知ることの出来る人達が日本にも現れ始めたからである。近世のヨーロッパ地理學が、地理學の學問的領域を限定するために歴史的なるもの、思想的なるもの、國家的なるものを次第に除外して所謂景觀地理學に墮し、かつてアラビア人の東西兩洋にまたがる交通と共に發展した地理學や、イギリスの商業的植民地侵略と共に進歩した地理學等とは異つた、即ち實踐面を喪失した地理學に没落したと云ふ話を耳にしながら、近世ヨーロッパ諸國が、自己の世界史を確保して以來、

國家の意志を巧妙にも學問の世界から隠し去つた恐るべき事實の説明を聞かされてゐる思ひがしたのであつた。地理學者ラッツェルの業績と歴史學者ランケの業績、現代地理學に實踐性を強く賦與してゐるリヒトフォーヘン並びにハウスホーファ、歴史學を通して同様の役割を買つて出てゐるマイネッケやローゼンベルク、これ等の人々と獨逸史とを考へる時、久しきに亙るわが國民のヨーロッパ遍歴の無駄の如くして而も全くの無駄でなかつたことを思はざるを得ない。

最近アメリカに於ける東洋學に關する斯界の權威者の御講義を拜聴しつゝ、私は右の如き思ひを一層深くしたことである。この講義によつて自分個人は色々知識を與へられて非常な喜びを感じたのであるが、一面に於いてヨーロッパ近世史學のもつ根本的な弱點——弱點ではなくある意味では學問的謀略とも云へよう——である國家意志の喪失、即ち國家の意志が學問の中から除かれてゐることを今更の如く見せつけられたやうな氣がしたのであつた。アメリカがこゝ百年間東亞に對して如何なる國策をもつて臨んだかを知るならば、そこに明治四十一年以來の對支文化事業、團匪賠償金返還によつて基礎付けられた支那人のアメリカ流教育、支那のアメリカニゼーションの意味が明瞭になる筈である。一九二九年頃からアメリカの東洋學が急に發達したと云ふ意見は、現象的には必ずしも誤謬ではないが、明治四十一年以來の支那アメリカ化のための教育の

實^{ミナリ}が、約二十年後に至つて現はれたと見なければ、眞實の歴史性は把握出來ないであらう。かやうな解釋がなければ、歴史の上に重要な役割を有する國家意志乃至は國家そのものの意味が考察の中に取り入れられない。國家の意志が問題とならざる限り、近代史は到底正しい解釋を得ないであらう。歐米諸國の世界侵略、世界制覇はもとより、民族問題も植民地問題も、支那事變もアメリカ問題も遂に學問的に取り上げられないのである。

私は今日日本人に最も必要なことはヨーロッパ文化の全面的否定であると色々な會合で語り、書き物を通して繰り返してゐる。又尊皇攘夷こそが今日の日本の態度でなければならぬとも云つて來た。今も尙さう考へてゐる。幸にして過去數十年間、幾萬、否幾億の日本人が思想的學問的にヨーロッパを遍歴して呉れたので、私がこのやうな口幅たいことを確信をもつて云へるやうになつたのである。ヨーロッパ諸國の國家の意志がこれ等の遍歴の結果私輩にも明確に把握されるからである。ヨーロッパの近世的科學の本質を知ると同時に、これを一旦解體したる後に、日本の立場に立つて、再構成するにあらざれば、眞に日本を裨益し得ないことをわれらは覺らねばならない。即ちヨーロッパ文化の全面的批判とは、このやうな立場に於いてなし得るのであつて、この立場に對して、極端なる排外思想とか、偏狹な日本主義等と云ふ批判をするものは、自らの

植民地人的性格を暴露するだけである。ヨーロッパへの思想的學問的遍歴の末、ヨーロッパ文化の全面的否定を確信をもつて斷行する立場に立つことが、現代日本の先驅者の立場でなければならぬと思ふ。紀元二千六百年の佳き年を迎へ、小數乍らこの立場に立つ日本人が出現したことは、私にとつては何にもまして喜しいことである。

紀元二千六百年の祝典に、五萬五千の國民が親しく勅語を賜はつた。この感激は、日頃理論以上のものがないと云ふ迷想を抱いてゐた人々とても、必ずもつたことであらう。云ふところの大政翼賛運動は、眞の國體明徴に他ならないのであるが、わが國の政府の新體制が、この式典を通じて、私には明瞭にわかるやうな氣がする。毎年數回宮城前に數萬の民草が集まり、陛下より親しく勅語を賜はつた後、閣僚達から政策の大綱を示すと云ふ政治の新體制が出来上つたならば、思想問題も、所謂社會問題も、外交問題も容易に解決がつくであらう。

附 錄 北 支 視 察 報 告

一、青 島

青島に於いては、各方面の人々と連絡し、統計表、報告書等を調査したる他、公私立中等學校生徒男女十二名と座談會を開いて、第三國文化工作の模様を聴取した。報告書の中、基督教防變委員會に關するものは當地に於ける一般的情況を推察し得るものであるが、それには、次の如く見えてゐる。(二五九九・八・八)

在青島基督教ハ信義會、浸信會、親々會、靈恩會、長老會、救世軍等各派ニ分カレ居リ、之ヲ統一スルモノニ數年前設置サレタル中華聯合基督教會(上海路)アルカ、本夏反英運動ノ盛トナルヤ、之等教會中ノ親英分子ハ、頻ニ教徒間ヲ奔走セル結果、別ニ中華聯合基督教會防變委員會(聯合會内)ナルモノヲ設置シ、七月一日各會ヨリ左記七名ノ代表ヲ推薦シテ、コレガ委員トナセリ、(省略人名)

尙七月十日左記重要決議ヲナシ實行スルコト、セリ

(一) 一般基督教徒ニ通告シテ教徒並ニ其家族ハ何レモ三日内ニ手札型寫眞ヲ防變委員會ニ提出セシメ、之ヲ登記シテ事變發生當時ノ身分保障ニ備ヘシム

- (二) 凡ソ基督教徒並ニ其ノ家族ハ反英大會等一切ノ運動ニ參加セサル事
- (三) 防變委員會ヨリ毎日輪番ニ會員二名ヲ推舉シ(籌備委員ニ限ル)祕カニ各所ニ於ケル反英大會情況等ヲ調査報告セシメ以テ將來ノ抵制運動ニ資セシム

因ニ本報告書ハ七月十二日入手セルモノナルカ、當時有力教徒ニ付調査セルモ寫眞提出等ノ事實ナク、或ハ幹部間ニ斯ル計畫アルニ過ギズト思惟シ居ルトコロ、更ニ本日前記委員名ヲモ重ネテ報告シ來レルヲ以テ一應報告スルトコロナリ。

「因テ書」に見ゆる通り、確實なる報告ではないが、他の場合に於ける基督教徒の暗躍の事實を以て推定すれば、この報告は必ずしも虚報でないと思ふ。元來支那人基督教徒は、教會に加はることによつて、軍閥の不當なる誅求をまぬかれ得た——軍閥の第三國に對する遠慮によつて——のであるから、今回の事變に際しても、右の如き誘引は相當の効果を期待し得べきものと判断し得られる。

第三國關係の學校の主なるものはアメリカ系で、イギリス、ドイツ、スイス、ロシア等は數の上に於いても質の上から見ても、アメリカに及ばざるものゝやうである。われら一行との座談會

に出席した中學生は、男子側、市立中學東文書院、私立崇徳中學(アメリカ長老教會經營)、女子側、市立女子中學、私立聖公女子中學校(アメリカ・カトリック教會經營)私立文徳女子中學校(アメリカ長老教會經營)の各三校、一校より二名づゝ、計十二名、飯田教育局副局長司會の下に行つたのであるが、私立のミッションスクールは市立のものとは全く思想内容を異にし、學校に於いて教へられてゐる教授の内容を相當大膽に吐露した。——二名づゝ招いたため、回答の際、自己の正直な告白をする代りに、お互が學校で教へられてゐる通りを答へれば無難だと思惟したのであらう。

市立學校の生徒は、男女共に極めて微温的に日支提携の要を説き、東文書院(興亞院指導)は、日本語を以つて、東亞新秩序建設のためには日支協力の他に道なしと教科書の通り暗誦的に、答へ、西洋文化を一應否定しつゝ東方文化宣揚の必要に論及、更に印度開放の問題にも觸れ、日滿支印度が一體とならねばならぬとも云つた。思索が未熟であつて、その言ふところと信念とが果して一致せるや否やは疑はしいが、少くとも態度は眞剣味を帯び、指導者の努力買ふべきものがあつた。

これに反し私立側は反戰的思想を有し、崇徳中學の一人は、共產主義、國民主義、ナチズム、

ファシズム、自由主義の如何を問はず、事を戦争に訴ふることは罪惡であるとなし、ミッションスクールの女學生は、四人共、異口同音に、キリストの愛に叛く一切の武斷行爲を否定した。その間、興味深いことは、崇徳中學生が、佛教は消極的且否定的思想であつて空を説き、現實的な解決の道を示さないが、キリスト教は積極的建設的であつて、支那の將來にとつて希望を與へるものであると主張したことである。これに對し、市公署の大久保氏が、今次聖戰こそ眞の世界平和への道を拓くものであると述べたところ、右の生徒は、罰はキリストのみこれを人間に課し得るものであると反駁した。

話題を轉じて世界中で誰を最も尊敬するかと云ふ質問を發したところ、ヒットラーと答へるもの五人（中一人は、蔣介石を今まで偉人として尊敬してゐるが、この人を除けば、と云ふ限定を附したものがあつた——私立崇徳中學生）諸葛孔明一人（東文書院）、他はキリストと答へた。

これについて最近讀んだ書物のうち感銘を受けたものを聴取したところ、市立學校生は無しと答へ、併せて雑誌を讀みたいが、目下中國には適當なものなしと附言した。東文書院の二人は、少年俱樂部、日本小學一年修身書、ミッションスクールの連中は新約聖書、英文小説及探偵小説と答へた。支那青年が讀むべき書物を有しない現状を見ることが出來ると同時に、出版物による

思想指導の可能性を茲に認め得たのである。

當地に於ける醫療施設及教會の統計的調査表等は、何れも所管當局にある故、これを省略する。

第三國系の出版物を販賣せる店舗は二ヶ所あり、(Foreign Book Store と International Book Store)前者は相當大規模に經營し、在架書物の種類及部數も豊かであるが、後者は極めて貧弱な店である。Foreign Book Storeの主人は、來客に書物購入の指導等をする能力があり、支那研究書、教科書類(各國語)新刊書等が可なりよく整理せられてゐる。現在のところは、寄港の旅行者相手が主で、文化戦に積極的に參加し居るやうには見受けられない。

二、濟 南

濟南は水害のために旅程を變更した結果立寄ることゝしたので、極めて短時間のうちに各所を見物し、關係諸官廳を訪問した他、齊魯大學を見學したのみである。街の様子、日本人の活躍状況等は省略し、第三國の文化活動状況のみを記さう。

支那に廿餘年前來居住し専ら教育方面に活動し、今日縣公署に勤務しある豊田氏をはじめ日本

人教育關係者について聞き質したところを総合すると、この地方の第三國の文化施設に關する調査は未だ不充分の域にあり、學校、教會、醫療施設等に關する數字的調査も濟南市以外の分は未整理であつた。濟南市公署教育局では「山東省に於ける外國系學校表」「外國醫院表」「山東省内教會調査 民國二十七年十一月」等を閲覽した。

諸氏の談によれば、この地方の外國勢力は表面やゝ後退した如く見えるが、實は、奥地に至るまで、彼等の永年の間に扶植した勢力は容易に衰へないでゐるやうである。濟南市の就學兒童率は事變前三二%（山西は全國で最もよく五五% 民國二十六年度調）一校の生徒數平均四十人、教師は大抵一人、一校宛の經費は年額百圓と云ふ狀況であるに對し、ミッシェン系の學校は、大學より小學校、幼稚園に至るまで整備した設備と潤澤なる經費とを有し、人心收攬の上に尠なからぬ力となつてゐる。

而も事變勃發以來、皇軍の活動は、彼等の永年の地盤に動搖を與へつゝある故、陰に陽に日本に對し不利な情勢を誘導するため、ミッシェンを中心とする文化施設は動員せられてゐる。例を濟南附近に求めれば、德縣のアメリカ系病院は、匪賊の入院を歓迎し、これが經營に當つてゐる教師は、敗殘兵若しくは傷病兵より得た情報を蔣介石側に傳達してゐた事實が、ある方面の調査

によつて判明し、又、齊魯大學附屬病院は、照明信號にて、日本軍の動勢を支那側に傳へた如き例があつた。外國系學校、教會その他は所謂權益であり、治外法權の保護下にある故、餘程慎重に、且つ巧妙に取扱はなければ、調査すら充分に行ひ得ぬものゝやうである。

齊魯大學 教育局の方々の案内で視察した齊魯大學は、山東省の最高學府、英米加教會の共同經營にかゝり、設立後三十年の歴史を有し、こゝに集る學生の大部分は、山東省内のミッシェン系中學校の卒業生であり、本學卒業生中、優秀なる學生は、中華教育文化基金董事會に頼り、主としてアメリカに留學することになつてゐる。

〔參考——外務省文化事業部編、「滿洲及支那ニ於ケル歐米人ノ文化事業」昭和十三年三月〕

一、所在地 濟南南關

二、沿革 一八六四年米國長老派「カルビン・マテイア」博士ニヨリ山東省登州ニ文會館ト稱スル一單科大學設立セラレタルカ、一九〇四年ニ至リ、右文會館ハ濰縣ニ移轉セラレ、其後英國浸禮派ニヨリ設立セラレタル青州ノ廣德書院大學班ト合併セリ、右合併後前記兩教會ハ協同シテ濰縣ニ文科及理科、青州ニ神學科、濟南ニ醫科ノ各大學ヲ經營シタルカ、一九一七年ニ至リ青州及濰縣ノ大學ヲ濟南ニ移シ、南關ノ地ニ綜合大學ヲ開校スルニ至レリ、

思想

二一四

三、經營主體 本大學ハ英、米、加奈陀等ノ各教會ノ聯合ニヨリ經營セラル、其國別及名稱等ハ左ノ如シ、

- 英國 浸禮會 Baptist Missionary Society
- 同 聖公會 Church of England
- 同 倫敦會 London Missionary Society
- 同 循道會 Methodist Missionary Society
- 同 長老會 English Presbyterian Mission
- 加奈陀 長老會 Canadian Presbyterian Society
- 米 國 北長老會 American Presbyterian Mission, North
- 同 南長老會 American Presbyterian Mission, South
- 同 美以美會 Women's Foreign Missionary Society of the Methodist Church

四、經營機關

一、管理委員會

經營主體タル各教會ノ代表者ニヨリ組織セラル、本部ヲ加奈陀「トロント」ニ置キ、倫敦

及紐育ニモ事務所ヲ設ク、現地管理委員ノ任免、補助金問題等重要事項ヲ管掌ス、二箇年

ニ一回前記三箇所ニ順次會合シ、聯絡ヲ計リ居レリ、

二、現地管理委員會

本校教職員ヲ除ク支那各地大學教授、宣教師其他有力者ニヨリ組織セラレ、本校ニ隨時會合シ、教職員ノ任免其他學校ノ直接經營ニ關シ協議ス、委員數ハ十五名ニシテ、内中國人十一名、英國人二名、米國人及加奈陀人各一名ナリ、

五、學制 本大學ハ文科、理科、醫科ノ三部ヨリ成ル、修業年限ハ文科、理科各四年、醫科ハ五年ナリ、

六、教職員並學生

教職員、本學々長ハ中國人劉世傳ニシテ、外ニ教員九十三名アリ其内譯左ノ如シ、

	中國人	外國人	計
文 科	二二	一〇	三二
理 科	二二	五	二七
醫 科	二三	一一	三四

思想 暇

合計

九三

二一六

外ニ經營事務ニ當ル職員三十名アリ、

學生、學生數ハ文科二一四名、理科二三八名、醫科一一五名、計五六七名ナリ。
七、附設機關並學校

一、齊魯大學圖書館

(內容省略)

二、國學研究所

(內容省略)

三、齊魯病院

(內容省略)

四、看護學校

(內容省略)

五、齊魯神學校及齊魯大學廣智院

(內容省略)

八、經營施設ノ投資額並ニ一箇年ノ經營費、建設投資額 約百萬元、
自一九三六年至一九三七年經營費豫算 四十六萬元、歳入内譯左ノ如シ、

各教會ヨリノ補助金

二〇〇、〇〇〇元

本部ヨリ教授俸給トシテ直接教授宛來ルモノ

一四〇、〇〇〇元

國民政府補助金

二四、〇〇〇元

其他ノ收入

九二、〇〇〇元

計

四六〇、〇〇〇元

學校の敷地は數萬坪に及び、禮拜堂を中心に、圖書館、神學教室、物理教室、化學教室、大學本部があり、その周圍に寄宿舎、教授住宅、テニス・コート、運動場、天文臺、農場、模範村 (Model Village)——支那人職員のためのもので、支那風による文化生活のモデルを示したものである。等があり、これに隣接して、醫學部及び、附屬病院、貯水塔もある。外部との連絡を絶つても當分は自活し得る自給自足的組織であるのみならず、附屬病院の如きは、名實共に濟南第一の内容を有してゐる。案内者は、同大學校務長 (Associate President) アメリカ人賴思源氏 (Howell P. Lair) 禮拜堂の屋上から學内のことは勿論、濟南市一般のことについても説明し、親友明治學院教授 R. W. Howard D. Hannaford 氏に宛てた名刺を筆者に託する等、洵に如才なきもてなしであつた。當局の意向では、條件を附して、同大學を開くことを許可するにほゞ決定せる趣であり、レーア氏の談も、これを裏書きするところがあつたが、其の後、不許可に逆轉した由を北京滯在中に新聞によつて承知した。

三、北 京

北京には前後廿日餘滞在し、興亞院華北連絡部文化部を中心に、日本及び支那の關係各官廳を訪うて種々教示を受け、放送局(中央廣播臺)、新民會、滿鐵經濟調查部等にも關係事項につき有益なる指導を受け、第三國文化施設の中心機關とも云ふべき華文學校、協和醫學院、輔仁大學、燕京大學を視察した。

北京のY・M・C・Aに於ける唯一人の日本人メンバーであり、在北京外國人とは最も接觸多い日本人某氏は次のやうに語つてゐる。

「北京では從來は最も優秀なる青年は清華大學に行つてゐたが、事變後同大學が閉鎖されたので奥地に赴くものが多い。——上海で入學試験を受けるのである。私の知つてゐる一青年も最近父の同意を得、病身の母には事の次第を告げず、南方に赴いた例がある。

現在北京に残つてゐる青年の素質は先づ第二流以下、それが燕京大學、輔仁大學、鐵路學校、新民學院と云ふ順序で學校を選ぶ。就中新民學院には氣概あるものは入學を好まぬとの世評である。燕京大學は事變後清華大學に代つて北京第一の學校となつたが、今以て抗日反日の一據點で

あり、掲示板には常にロイテルニュースを張り、常に日本の惡口を載せた新聞記事を掲示してあつた。私は事變後この地に來て、聽講生として入學し、それとなく牽制せんとしたのであるが、色々の都合で志を果さず、そのまゝ今日に至つてゐる。今から考へると如何にも残念である。

一般的に云つて、外國人と關係ある支那人間の抗日思想は、今日でも相當の程度に激しく、米人の家に寄寓してミッション・スクール(女學校)に通學せる一支那人生徒がアメリカ人と會談してゐるのを聞いたことがあるが、これによつて、侮日的態度が彼等女學生間に充滿してゐる有様を知ることが出來た。教會では元來民族間の平等が主張せられ、従つて他民族に向つて惡口を吐くことは少ないのであるが、日本人に對しては随分露骨な反感を示すのに驚いた。嘗て私が自分の通ふ教會に日本人のオーガニストを採用することを提議したところ、日頃私に好意を寄せた連中まで一緒になつて強硬に反對し、Enemy's Side より左様なものを採用したら、一般の人々から非常な非難を被るに相違ないと云ふものさへもあつた。

大體支那のインテリ青年には、歐米崇拜者が多いが、Y・M・C・Aの如きは特にその傾向強く、私もそのメンバーになつてゐるY・M・C・Aテニス俱樂部では、お互同志英語で會話をなし、支那語を使用するのを恥辱と心得てゐるやうに見える。これにはいさゝかあきれざるを得な

燕京大學 ストリドン學長(司徒雷登)の主宰する燕京大學には、歐米人教授四十餘名、支那人職員約七十名、學生は男六百、女四百都合一千名が在學し、日本人は一人も居ない。教授陣に最近加はつた鳥居龍藏博士の一家が、僅かに直接これに關與してゐるに過ぎない。筆者がこの大學を訪れたのは九月十二日の夕方のことであり、下手な英語を使用する事務員に案内されて、金殿玉樓とも形容すべき學内の一覽が許された。

〔參考 前掲書〕

一、沿革 本校は民國八年(一九一九年)前北京通州協和大學、前北京滙文大學及前華北女子協和大學ノ三大學合併シ設立セラレタルモノニシテ、校舍建築費二百八十萬弗ヲ投シ、校舍寄宿舍及圖書館ノ設備整備シ、清華大學ト競争スル形アリ、一九二九年(民國十八年)國民政府教育部ヨリ大學ノ認可ヲ得タリ、從來本校ハ専ラ英米「ミッシヨン」ノ經營ニ係リタルカ最近純米國大學トナリ、協和醫學校ハ「ロックフェラー」財産ニ支ヘラルルニ對シ、本校ハ「ハーバード」大學トノ合併ニ依リテ特徴ヲ示シ「ハーバート」ノ外ニ「プリンストン」大學「ミヅリー」大學「ウェルズリー」

大學等トモ聯絡アリ)「ハーバート」トノ合作ハ「ハーバート」燕京學社ナルモノノ活動ニ依リテ「ハーバート」燕京學報其ノ他ノ出版物ニ依リ極メテ活潑ナル活動ヲ爲シツツアリ、

二、學制 三學院十九學系トス左ノ如シ

文學院 國文學系、英文學系、歐洲文學系、歷史學系、哲學系、社會學系、教育學系、新聞學系、音樂學系、

理學院 物理學系、化學系、生理學系、地理及地質學系、數學系、心理學系、家政學系、

法學院 法律學系、政治學系、經濟學系、

卒業年限 本科四年、專修科二年

三、教授數(民國二十三年、一九三四年發表)

男女合計一一一人(中、外人四四)男教授八八人、女教授二三人ナリ、科別ニテ示セハ、左ノ通、

文學院	計	中國人		外國人	
		男	女	男	女
六四		三〇	四	一八	一一

理學院	三〇	一七	三	七	三
法學院	一七	一三	一	三	一

- 四、學生數 民國二十二年秋ノ調査ニ依レハ本科七八八名ニシテ其ノ中女學生二四五名アリ、
五、卒業生、民國九年（一九二〇年）ヨリ二十三年（一九三四年）ニ至ル間本科及專修科卒業生一、三五八名ナリ、

六、經費 年額約八十萬元、學費授業料ノ年收約十一萬元ニシテ、不足額ハ米國「ミッション」ノ調達ニヨルモ、時々中央庚款董事會ヨリモ補助ヲ受クルコトアリ、

門の左手には歴史研究室、それに續いて男子寄宿舎六棟、こゝに支那學生と歐米學生が共同生活を營んでゐるが、生活様式は全くアメリカ式で、日本で云ふならば高級アパートメントと云ふところである。これに直角に宮殿造りの體育館があり、折からバスケットボールの試合が行はれてゐた。一階と二階（ギャラリー）では、男女學生が見物し、盛んに歡聲と聲援とを送る。二階の一室にあるビンボン室、階下のロッカールーム等は、日本の一流のゴルフ・クラブでなければ見られぬ代物に近い。

體育館の左手にはテニスコートが數個あり、その一部では、バドル・テニスに夢中になつてゐる連中がある。この附近は外人教師の住宅區域らしく、その家族とおぼしき一行が自動車で歸つて來た。

體育館の後方には、ラマ塔、前面には大きな池があり、緑の芝生の中を通る小徑を男女學生が夕方の散策を楽しんでゐる。洵にアメリカ的な風景である。正門の右側には、化學生物學、國學等の教室が、それ／＼別の建物の中に陣どり、大學本部——二階には二千人を收容し得る大講堂と新聞部、階下には事務室、揭示場その他）學内病院、教授住宅、女子寄宿舎、學長住宅、グラウンド等が數萬坪の廣大な敷地にゆとりを以つて配置されてゐる。綠色の瓦、極彩色の欄間、朱塗の柱に飾られた諸建築物が、近代的な美しい田園的、公園的風景の中に聳え立ち、文字通り、支那青年の天國の觀がある。この天國と北京市との間には大學専用のバス——Yenching University と書いた黄色の美麗なバス——市營バス等は全く比較にならない——が通ひ、これ又齊魯大學と同様に別世界をなしてゐる。こゝで教へられる諸學科の内容は、恐らく低級なものであらうが、こゝに醸成されてゐる親米的雰囲気は、充分われ等の注意を促すべきものであらう。大學要覽を請求したが、そのやうなものはないと云ふ答へであつた。各大學専門學校は、從來は何れもこれを備へてゐた筈であるから、適當な手筈によつて、全支の重要大學の要覽を蒐集し置くことの必

要を感じさせられた。

輔仁大學 輔仁大學はアメリカ系カトリックの經營になるものであるが、理學關係に獨逸人教授を擁してゐる。筆者がこゝを訪れた八月二十九日女子部校舎の増築中であり、基金の潤澤を思はされた。細川教授(元成城學園教授)が内地に歸つて居られたので、校務長雷冕(Rahmann)氏に面會したる後、事務長 Heidrich——日本に暫く滞在し日本語を話し得る獨逸人——の案内で學内を一覽した。物理と化學の教室の指導教授は獨逸系が占めてゐるが、講義は英語で行はれるらしく、實驗室の説明に當つた支那人助教授の如きは、可なり自由な英語を話してゐた。學問内容、實驗設備等は日本の中等程度の工業學校を思はしめるものであつた。

〔参考 前掲書〕

本大學ハ米國「カソリック」教會ニ依リテ設立セラレタルモノナルカ、現在ハ寧ロ獨逸系「カソリック」支配下ニ在ル感アリ、(創立民國十四年、一九二五年)民國十六年國民政府教育部公布ノ大學組織ニ依リ、文學理學及教育ノ三學院ヲ設置シ、之ニ醫學專修科及美術專修科ノ二科ヲ附設シ、民國十八年(一九二九年)中學部及女子中學部ヲモ開設ス、

一、組織 三院十二學系

一、文學院 國文學系、史學系、西洋語言文學系、哲學系、社會科學系、

二、理學院 數學系、物理學系、化學系、生物學系、

三、教育學院、教育學系、心理學系、附美術專修科、

二、教授及校長

校長 陳 垣

文學院長沈兼士 外教授講師六〇名

理學院長嚴師 外教授講師四五名

教育學院長張懷 外教授講師四〇名

三、學生約六百名トス、

大學附屬輔仁中學民國十八年成立、年經費四萬二千、校長陳垣、教職員五四、生徒三六〇、女子部は副學長のアメリカ人の尼さんが案内に當つて呉れたが、建物の改造(宮殿陞 Kunze Wang Fu)未完成で、雜然たる狀況である。併し、原型を出来るだけ失はざらしめる努力の拂はれてゐる點、第三國人の對支文化事業の巧妙さを示すものと云へよう。學内に使用せる機具類、例へば印刷機械——教科書その他學問に必要な印刷物を作る小工場内にある——の如きは何れ

も獨逸製品である。案内のハイドリツヒ氏が、「支那の青年は大層この學校を愛します」と云つた言葉と共に大いに考慮に價することである。民國二十七年度版「私立北平輔仁學一大覽」及び「Catalogue of The Catholic University of Peking. 1938—1939」に、學内の詳細は見えてゐるから、——學曆、學則、研究所暫行規程、創辦人、監督、校董會職員錄、及各項會議出席人員、教員錄、課程表（甲 研究所、乙 本科〔文學院、理學院、教育學院〕）特別研究工作、國文學研究室、定期刊行物、統計表、二十五年卒業生錄、二十六年卒業生錄、二十八年卒業生錄——これらもこの稿には省略に従ひ、參觀の印象のみを記した。

これ等と相並んで、支那歐米化の重要據點と見做すべきは、ロックフェラー基金で經營されてゐる協和醫學院と、アメリカ經營の文化戰大學たる華文學校の二者であらう。

協和醫學院 Peiping Union Medical College も燕京大學等と同じく支那の宮殿建築を模した華麗莊嚴なる建物で、コンクリート造り、アメリカ近代機械文明の粹を集めた施設を誇つてゐる。(一)醫學教育(二)醫學研究特に東亞の特殊問題研究(三)近代醫學知識及公衆衛生知識の普及を提唱せる五ヶ年制度の學校で、醫學の他に、生物學、物理學、化學の研究室が設けられ、大學院の制度もある。附屬病院は學生と卒業生との實習のために開放せられ、最初は急病人の收容と施療

に主力を注いだが、次第に一般の患者をも收容し、現在では北支第一の完備した病院である。

この病院の看護婦を養成する必要から生まれた看護婦教育機關も附設せられ、三十四ヶ月の期間に一人前の看護婦が養成されてゐる。

支那事變勃發以前、この大學正科醫學生の數は一一七名、看護婦學校生徒は三九名、その他選科生、大學院學生の數は一七五名（内支那人一五五名）であつたが、この數は今日に於いても大した變化はない。教授陣は歐米人五一名、支那人一一一名、使用人に至つては、一四四四名に上り、それ等の人々のためには、設備の完全なる寄宿舎がある。一棟三十名乃至四十名を容れる立派な學生の寄宿舎、看護婦寄宿舎等近代的偉容を示してゐるのである。

内部を巡覽するに、日本の如何なる病院も及ばぬ整然たる設備があり、多數の掃除夫の手で四六時中清掃せられ、廊下には埃一つ見出されない有様である。

校舎、病院、學生集會所、看護婦ホーム、教授や學生のアパートメント以外に、病院専用の蒸氣及電氣供給所、照明ガス、酸化窒素ガス等の製造所、機械設備による大洗濯場、實驗用動物飼養場、自動車車庫、機械工作所等が各々一區劃をなし、軍艦の機關部の中を通る心持がする。

精密なる電氣裝置に要する電氣は、北京市の提供する電流が時刻により強弱があるため、これ

を利用し難いので、石炭による病院専用の発電所が設けられ、洗濯場では、先づ汚れた衣類が種類別に分けられ、これが別々に大きな洗濯機械に投ぜられ、清潔になつたものは、大アイロンを兼ねた乾燥機の間からプレスされて出る仕組になつてゐる。こゝに働いてゐる支那労働者は、眞白なアイロンのかゝつた服装をつけ、町で見る支那人とは丸で人種が異ふやうに見える。炊事場も恐らく北京第一のものであらう。こゝには蠅等は見ようにも見られぬ。蒸氣消毒器、蒸氣釜、料理臺等々、インテリの奥様が見ると羨望の的となるものづくめである。既に調理を終つた夕食は支那風の献立、それが運搬用の車に整然と積み重ねられて行く。

病院のベッド数は三五三、外來患者は毎日約六〇〇名、當直醫師は六八名、看護婦は二五八名（内支那人二四〇名）入院料はAサーヴィス一人部屋一日八弗―一四弗、二人部屋六弗―八弗、Bサーヴィス一人部屋八弗―六弗、二人部屋四弗。貧窮者を一日一弗半實費で入院せしめる規定もある。東京の聖ロカ病院風のやり方で、外人の入院患者もかなり見受けられた。嘗て住んだことのない清潔で立派な御殿に起居し、安直な経費で、宿病から救はれ、或は難症を回復する支那人にとつては、燕京大學とは又異つた意味での天國である。

殊に外來患者の診療は安直で、一般の支那民衆がアメリカの慈愛を體得するには洵に好都合で

ある、初診料三十錢、再度の場合は二十錢、その他に施療のあることは云ふまでもない。約三十年間に、この施設によつて把え得た支那の民心は、もとより計量の限りではないが、頗る大なるものであつたことは疑ふべくもない。

この大學の創立は明治三十九年（二五六六年）、大正四年（二五七五年）迄は、英米各ミッションの協力によつて經營せられ、この年の七月ロックフェラーの「支那醫學のための資金」によつて繼承せられ、大正十年（二五八一年）大學と病院との設備が完成した。この間注目すべきは、初めの間メンバーの任命権を有してゐたミッション諸團體が、表面から後退し、少くとも表面的には、支那本位のものとなつたことである。このやり方は、たゞにこの場合に限らず、他のアメリカの對支文化工作にも見られるところであつて、これによつて支那知識人の歡心を買ふことが出来たのである。

〔参考 前掲書〕

本校ハ附屬病院ト共ニ専ラ「ロックフェラー、ファウンデーション」ニヨリ經營セラレ居ルモノナルカ、一九三七年ニ於ケル本校ノ狀況ヲ概述スレバ、左ノ通り、
一、一九三六年度卒業生

本年度卒業生ハ一五名ニシテ、何レモ中國人トス、

二、在校學生

在校生八八名ノ外、卒業生ニシテ附屬研究所ニ残り、特別研究生タルモノ一六名アリ、此ノ外聽講生四二名、

三、教授及教員

教授十二人(内支那人六外人六) 副教授二人(支一、外一)、 Visiting Professor 十一人(外)、 Associate Professor 十一人(支七、外四)、 Assistant Professor 十五人(支一〇、外五)、 Associate 二十八人(支十六、外十二)、 Assistant 四五人(支)、 名譽講師六人(支外各三)、 計一三一人(支九八、外二二)ニシテ、之ヲ一九二二——一九二二年度ノ總計三九人(支九、外三〇)ニ比スレバ、著シキ増加ナリ、

四、學科

(一)解剖學科(主任教授 D. Fortuyn) 同科ニ於テハ、人體解剖ノ研究ノ外ニ、特ニ人類學的研究ニ注意シ、支那政府ノ機關タル支那地質學研究所ノ好意ニ依リ、有史以前ノ人類研究材料ヲ供給セラル、所謂「北京人」ノ研究ハ特ニ世人ノ知ル所トス、

(二)生理學科(主任教授 林可勝)

(三)藥學科(主任教授 H. B. Van Pyke)

本科ニ是テハ、特ニ支那藥ノ研究ニ意ヲ用ヒ、特ニ化學品實驗所ノ設備アリテ、支那固有ノ材料ヨリ、少種類ノ藥品ヲ多量ニ製出シ居レリ、

(四)醫化學科(主任教授 吳憲)

(五)病理學科(主任教授 R. J. C. Hoepfht)

(六)細菌及免疫學(主任教授 林宗楊)

(七)內科(主任教授 F. R. Dienaide)

(八)外科(主任教授 H. H. Loucks)

(九)產婦人科(主任教授 J. P. Maxwell)

(十)眼科(主任教授 P. C. Kronfeld)

(十一)放射學科(主任教授 必光)

以上(七)——(十一)ノ五科ハ病院ノ設備ヲ利用シ、學科ヲ主トシテ實驗、訓練ヲ施シツツアリ

(十二)公共衛生學科(主任教授袁貽瑾)

本學科ニ於テハ、北平市政府ト連絡シ、衛生試験所ヲ設立シ、同校ヨリ學生及看護婦ヲ訓練ノ爲派出ス、

五、救濟事業

貧困者ニ對シ、無料ニテ診療投藥ヲ爲シ居レリ、

六、附屬病院

建築設備ノ完備セルコト北京第一ニシテ、在留外人ハ素ヨリ、支那人患者極メテ多シ、
七、豫算

一九二六年六月末ニ至ル一ケ年ニ支出セル經費(病院ヲ含ム)ハ、約八九六、五〇二弗ニ達シ、未タ會計上獨立スルヲ得ス、不足額ハ相當多額ニ上ル模様ナルモ、何レモ「ロツクフェラー」財團ニ於テ補填シ居レリ、

華文學校 (College for Chinese Study) は、五十年前アメリカ人によつて設立せられ、外國人に支那語及支那事情を教育する機關としては隨一のものであり、現在日本人でこゝに學んでゐるものもある。云はゞ在支アメリカ文化戰大學であり、文化戰士養成の上に多大の功績を残してゐるのである。加之、日本官憲の嚴重なる檢問から救はれる歐米人の宿舍としての役割をも充分

に果し得るものである。

〔參考 前掲書〕

以前ノ名稱ハ North China Language School ト稱シ、専ラ歐米各國ヨリ支那ニ傳道ニ來ル「ミツシヨナリー」及一般外國人ニ支那語及支那學ヲ教授スルヲ目的トシ、基督教青年會(一八九〇年米國人「ゲーリー」氏ノ設立ニ係リ、會館ハ「ヴァナイーカー」氏ノ寄附ニ成リ、會員約四千名ヲ擁ス)ノ經費ニシテ、同校ハ極メテ豊富ナル歐米人ノ東洋研究ニ關スル著作ヲ網羅セル圖書館ヲ備ヘ、一般研究者ニモ自由公開シ居レリ、尙同校ハ燕京大學ト極メテ密接ナル聯絡ヲ保ツ外「ロスアンゼルス」「サウス・カリフォルニア」大學ト連絡ヲ取り、本校卒業生ハ論文ヲ提出シテ「マスター、オブ、アーツ」ノ資格ヲ得ル特典アリ、校長「ベタス」ナリ、

又同校ハ Hotel ヲ經營シ、外人旅行者等ノ爲便宜ヲ與ヘ居レリ、
筆者がこゝを訪問した時、門前には數多の洋車が客を待つてゐた。玄關から老若男女の歐米人が楽し氣に語らひ乍ら現はれ、洋車に命じて、思ひ思ひに街に出掛けて行つた。これは云ふまでもなくこゝをホテルとして動く人々の群である。

案内をして呉れた支那人は勿論英語は流暢に話せる。玄關を這入ると全く博物館の様な感がす

る。支那の石器、土器、古銅器、貨幣等の立派なコレクションが、整然と陳列棚に整理され、一方には支那畫、支那書蹟等の寫眞がガラスのケースから呼びかけてゐる。日本の一流の博物館にも發見出来ないやうな品々が相當の點數あるやうに思ふ。こんな陳列に目のない筆者は、つい博物館に来てゐるやうな錯覺に陥つてしまつた。建物の正面殊に二階に登る階段の周圍は、このやうな貴重な遺物で飾られてゐる。こゝに暫く滞在して、適當な指導者につけば、一寸した考古學者になるのは易々たることである。

こゝを一覽して東側に廻ると、こゝは圖書館である。その分類棚を見ると、日本、支那、西域、印度その他アジア各地に關する數多の文獻が收藏されてゐる。この圖書を利用出来るある人の談によれば「北支で排日文獻を見ようと思へば、華文學校の圖書室が第一である」と。さもあらなんと肯ける。日本近代科學圖書館では、山室館長以下の努力で、日本と支那に關する歐米の文獻をかなり蒐集してゐるが、華文學校のそれには到底及ぶべくもない。明るい窓際には、兩面に書物を置く書架に區切られた小室が並び、白髪まじりの老婦人、支那の青年、牧師志望らしい白人等が熱心に讀書をしてゐた。

かくして、こゝに學ぶ文化戰士達は、アジアの文化、經濟、政治、風俗等々について、各々の

天分を生かし、一應の専門家に仕上げられる。加之、如何にして支那青年層に排日思想を涵養すべきかを修得するのである。

二階は禮拜堂、その禮拜堂の兩側は、各十室位のコムバートメントである。こゝで戰士達は支那語その他必要な題目について個人教授を受ける。この他に數人を一緒に教へ得る小教室の設けもある。かうした行届いた教育が、華文學校に来る人々に對して施されてゐるのである。こゝで數ヶ月、或は數ヶ年、各々必要に應じ、自信を得るまで教育を受けた戰士は、立派な支那語を話すのみならず、支那に關する何等かの専門家に成長してゐる。こゝを巣立つた戰士達は、どんな田舎へでも敢然として出掛けて行く。堅い信仰を有つ宣教師として、又は熱心な學者として。かくして、彼等は民心に喰ひ入つて行くのである。

筆者の參觀は僅か十分、餘りゆつくり見るとを好まないかに見えたが、廊下の各所には歐米人も支那人も、何時までも樂しげに話し合ふことが許されてゐるのである。而も私の通つた廊下は、その建物のほんの一部分に過ぎない。ホテル、その他廣大な建物は、二條胡同から三條胡同にかけて占められた廣い土地に互つて建てられてゐるのである。本館の兩側には、立派な住宅が數軒ある。これは指導者が本國に居ると同じ安易な氣持で暮せるスウィートホームである。テニ

スコートの金網も外部から見える。

華文學校が歐米人自らの文化戰大學であることは、僅かな時間の視察でこれを確かめることが出来たが、これと並んでイギリス直營の文化戰大學とも云ふべきものに「華北救世軍々官練習所」なるものがあることを注意せねばならぬ。アメリカの經營するもの程に金はかゝつてゐないが、支那青年子女を救世軍軍官にするための訓練所である。繁華街王府井通りを北に歩めば、支那風の様式に設計せられた近代建築、救世軍本部の數町先きに、「救世軍々官練習所」と云ふ物々しい看板を見出すことが出来る。前を通つたばかりで、内部を縦覽する餘暇がなかつたが、支那歐米化の重要な一據點として、基督教青年會と共に、更に一層注意深い看視を要する代物であると考へる。

北京に於いて大量に歐米の書物を販賣する書肆は北京飯店一階の一隅を占める French Book Store のみで、他には見出し得なかつた。歐文の雜誌、小冊子、單行本が非常に多く店頭に掲げられてあり、支那事變勃發後に英米その他で發行された支那問題に關するもの、上海で印刷せられたものも多く、旅行記、調査報告等の中には、日本に不利な文獻と判定すべきものも含まれてゐた。英語教育の普及によつて、こゝで賣られる一冊の反日毎日排日文獻は、相當廣範圍の支那

知識人間に弘められることを思ふて慄然たらざるを得なかつた。外人經營のホテルに對する政策、歐文出版物に對する政策、これ等は目下の處手をつけられてゐないが、速かにこの方面の對策が講ぜられなければ、スパイ戰、宣傳戰の上に大いなる弱點を残すことになる。

次に放送の問題であるが、これも仲々困難で、短波の受信機、放送機の取締りは實際問題としては仲々困難であるやうに聞く。右に關し、北京中央廣播電臺では、次の如く語つた。

「現在放送設備を有するものは、イギリスとイタリア兩國で、共に治外法權を利用して廣告放送に従事してゐる。これを中止せしめる目的で、我が中央廣播電臺に於いても低廉なる料金で廣告放送を開始した。反英運動を利用し、廣告主及びエージェントに、イギリスの放送に依頼せざるやう注意を發したが、目下日本に依頼せず、イタリアに注文し、この爲却つてイタリアの収入が増加する有様になつた。そこで、第二次としてイタリア側に買収の交渉を始める心組である。短波發受信機、若しくは重慶放送をキャチし得るものも現存してゐるが、その處置には十分の用意がなされてゐて、今の處心配はない。

事變前にはアメリカ系放送局が天津會なる名義で活動してゐたが、事變後南方に移轉した。交民巷にある先のイギリス放送機は事變前に國民政府に貸與してゐたものであり、イタリア大

使館内のは、今年より放送を開始したのである。事變後支那人所有のものは、廣播臺で買収した。蒋介石の放送中央集權主義のために、事變前から地方には立派な放送設備をすることが出来なくなつたので、買収した設置の如きも、貧弱なものに過ぎなう。」

昭和十六年三月十一日印刷
昭和十六年三月十五日發行

東京市品川区上大崎長者九二八四

國民精神文化研究所

電話 大崎 (49)
三三三
一一一
九八七

國民精神文化研究 (既刊)

第一册	古事記の成立	松本彦次郎
第二册	眞理とは何ぞや	小島正威
第三册	教育勅語渙發以前に於ける小學校修身教授の變遷	吉田宗熊
第四册	國民科學の成立	作田宗熊
第五册	古代詩歌に於ける神の概念	久松義一
第六册	我が國上代の國體觀念	河野延三
第七册	天地開闢即國家建立	西野省三
第八册	詩教と皇道	加藤勝之
第九册	共產治下に於けるロシア農民の生活	山本勝市
第十册	日本學としての學問教育	小野正康
第十一册	日本精神と社會の本質構造との關係に關する研究序説	川野貞一
第十二册	教育勅語渙發以後に於ける小學校修身教授の變遷	海田宗貞
第十三册	政治家の起原	吉田宗貞
第十四册	政治指導原理としての皇道	藤村只雄

第十五册	經濟生活に於ける創造者としての國家	作田恒輔
第十六册	思想左傾の原因及び其の經路	岡田正美
第十七册	蓮華王座	紀平省三
第十八册	我が國體觀念の發達	河野省三
第十九册	計劃經濟の試行	山本勝市
第二十册	國家主義の觀	川合貞一
第二十一册	法治主義の問	大串免代
第二十二册	地理辯證法のデザイン	小島威彦
第二十三册	社會主義的制度觀の批判其一	山本勝市
第二十四册	禮の意義と構造	西本勝一
第二十五册	自證過程としての歴史	小糸夏次郎
第二十六册	歴史の觀	川合貞一
第二十七册	近世の國體論	河野省三
第二十八册	教育勅語を拜讀して	小野正康
第二十九册	私有財産制度の研究	河村只雄

——ロシアに於ける統制經濟の研究 其二——

第二十五册	自證過程としての歴史	小糸夏次郎
第二十六册	歴史の觀	川合貞一
第二十七册	近世の國體論	河野省三
第二十八册	教育勅語を拜讀して	小野正康
第二十九册	私有財産制度の研究	河村只雄

第三十册	復古思想と寛政異學の禁	渡邊
第三十一册	御誓文	井上
第三十二册	皇道よ	藤上
第三十三册	フアッシストイタリアの教育改革	藤虎
第三十四册	明治文化の精神的底	吉田
第三十五册	中世に於ける文學道の建立	川合
第三十六册	唯心史	渡邊
第三十七册	教育勅語を拜讀して	久松
第三十八册	明治維新と皇道	野田
第三十九册	學者の基礎	小野
第四十册	日本政治學の基礎	河野
第四十一册	我が國體と世界	山本
第四十二册	眞正なる國體	藤深
第四十三册	近世に於ける神道的教育	大串
第四十四册	荷田	西晋
第四十五册	なるほどの春哲	河野
		三宅
		紀平
		正
		美
		清
		三
		郎
		夫
		雄
		饒
		美
		三
		康
		一
		一
		一
		誠
		次
		亮
		廣
		應

終

(第八年第三册)

7